

テニス少女の玉遊び

Natalie the Ball Player by Daylight23



1

うわあ、すげえ、まいった……。

ぼくは、ナタリーが登校してくるのを惚けたように見つめつつ、心のなかで呟いた。

すんなりと延びたきれいな脚が、白いスカートをはひらさせて、交錯して動いていた。美しい顔によく似合うコットンのテニスブラウスに覆われた豊かな乳房が、歩く度に大きく揺れ動く。

彼女は、学校の女子テニスチームの選手だった。スポーツブラだけでプレーしている彼女を見かけたことがある。その大きな胸を抑えているスポーツブラの紐が、乳房の重みではちきれそうになっていた。

彼女はぼくに近づいてきた。あのバスト、何インチあるんだろう……。メロンのように揺れる乳房に視線が集中した。そして、上半身に何も着けないで歩いている彼女が眼に浮かび、ペニスが痛いほど勃起していた。

「おはよう、ジェイク」

ナタリーが、訝しげな表情で、ためらいがちに声をかけた。シャツの裾が勃起したぼくの股間を隠してくれていることを願わずにはいられない。

ナタリーは高校三年生、ぼくよりひとつ上級生だ。とくに目立った存在ではないぼくに対して、ナタリーは学校でおそらくもつとも有名な女の子だ。おおぜいの友達がいて、それがみな粒揃いの美人。だから、ナタリーがぼくの名前を知っていただけでも、驚きなのだ。

「おはよう」

ぼくは、どもりながら返事をした。彼女に見つめられて、顔が赤くなっていた。なぜ、ぼくが彼女の前で居心地が悪いのか、その理由を悟られなくなかった。

まだ登校時間には早く、学生の姿はほとんど見えなかった。ぼくは、もうすぐ開かれる学期末のダンスパーティー会場の飾りつけを手伝うようサンダース先生に命じられ、いつもより早く登校した。

しかし、なぜ彼女もこんなに早く来たのだろう。ふと疑問が浮かんだが、ぼくの口は勇気を振るってこう言った。

「きれいだね、ナタリー」

はは、こんなお世辞が口をついて出るなんて……。

ナタリーは、その言葉に素直に反応し、和やかな表情になった。彼女の、メジカのようなブラウンの瞳が輝き、口許がほころんだ。額に垂れた麦色の前髪と、後頭部で結んだポニーテールが風に揺れた。

「あはは、ありがと。お世辞でも嬉しいわ」

彼女は微笑んでそう答え、無邪気に訊ねてきた。

「ジェイクは、こんな早い時間になにをしてるの？」

かわいい声音とナイスボディに、心のなかまでとろけてしまいそうだった。

ナタリーと二人きりで話している。ぼくにとっては奇跡でもあり、神様から与えられた恩恵ともいえた。一方で、一刻も早くその場を離れたい気持ちもあった。ぼくの鞆丸は精液ではちきれそうになっており、トイレに駆け込んで熱い興奮を放出してしまいたかったのだ。

「学期末のパーティーのための飾りつけをしろってサンダース先生から言われたんだ。ポスターとか、絵とかをホールや壁に貼るのを手伝えって。ナタリーは、なぜこんなに早く来たの？ テニスの練習？」

彼女は軽く笑って答えた。

「ううん、テニスの練習は放課後よ。私もサンダース先生から言われて、飾りつけの手伝いに来たの。今朝は用事があって、先生は早く来られなくなっただって」

それから、ちよつと言葉を切って、こうつけくわえた。

「なにか、不都合でもあるの？」

彼女は、ぼくの居心地の悪さに気づいたようだ。実際、ぼくは目のやり場に困っていた。彼女が口を開く度に、背中にしよつたバッグが揺れ、体にびったりしたテニスウェアを引っ張り、豊かな胸をますます目立たせている。

視線を落とすと、そこにはきれいな脚が延びているのだ。彼女は運動靴に白いくぶしまでのソックスをはいていた。その上に、引き締まった脚が伸びていて、そのさらに上には、白いテニススカートの裾がひらひらしていた。

神様。もつと落ちつかせてください。ぼくはそう祈り、なるべく抑制のきいた声を注意深く出して答えた。

数日前の放課後、帰宅中のぼくはテニスコートのかたわらを通りすぎようとして、足を止めた。コートでは女子チームが練習していた。ナタリーがフェンスのそばで、かがみこんでバッグをこそごそと探っていた。スカートの裾がめくれ、白いテニスパンツがあらわになった。ぼくは眼を見開いてじっと見つめていた。やがて彼女は立ち上がり、コートに走って戻った。彼女の胸がはげしく上下し、ぼくのペニス勃起した。ぼくは女子テニスチームのファンになって、試合の度に必ず応援にかけつけようと決心したものだ。

「不都合なんてないさ……」

ぼくは、またもやどもった。

「つまり、その、とても嬉しいよ。ちよつとぼくのロッカーに寄っていい？ テープとか、道具をそこに置いているんだ。そのあとで、サンダース先生の部屋にポスターとかを取りにいこう」

「わかった」

ナタリーが答えた。その声に、ぼくははつと我に返った。

「じゃあ、私は二階のロッカールームにいったって、本をロッカーに入れてくるわ。そのあと、一階のサンダース先生の部屋の前で会いましょ」

「オーケー、それじゃ」

彼女はくるりと踵を返し、軽やかに階段へと向かっていった。

そのかたちのいいお尻を見ながら、ふと、ひらめいた。

ぼくらは、学校の入口をはいったばかりのロビーで喋っていた。ロビーから二階に通じる階段は、吹き抜けになっていて、しかも階段の手すりは金属製の柵に支えられている。つまり、階段を歩いている人が棒と棒の間から見えるようになっていたのだ。

ぼくはしばしば、中休みや昼休み、階段を歩く女の子のスカートの内部が見える位置に身を潜め、一人で「覗き」を楽しんだものだった。たいていの場合、男子やスカートをはいていない女の子に邪魔されて見えないことが多かったが、幸運なことに、今はまだ、ほかの生徒は来ていない。

ぼくは、足音を忍ばせつつ、急いで彼女が上がっていった階段に近づいた。

ナタリーは、ちよつと階段をのぼっていた。スカートの下のかわいらしいお尻が揺れ、すんなりと伸びた脚が一步一步、交互に動いていた。残念なことに、テニス用のパンツがお尻全体を覆っていた。ビキニパンティだったらどんなによかっただろう！

突然、彼女は立ち止まり、かがみこんでほどけた靴紐をなおしはじめた。そして、うつむいた彼女と視線が合ってしまったのだ。

彼女は一瞬、靴紐をなおす手をとめた。ぼくは、雷に打たれたように硬直した。謝るべきか、弁解すべきか、迷った。だが、彼女はふたたび視線を彼女の足元に向け、靴紐を縛りはじめた。やがて彼女は立ち上がり、なにごともしなかつたように階段をのぼり二階へと消えた。

「どういうことだ……？」

ぼくは、戸惑うばかりだった。

「ごめんなさい。トイレによつてたから、遅くなっちゃった」

いきなり、背後で声が出て、ぼくはびくつとした。

ぼくは、ナタリーを待ちながらしよざいなく、サンダース先生の部屋のロッカーのドアを開けたり閉めたりしていた。彼女が入ってきたのにも気づかなかつた。

「あ、いや……いいんだ」

ぼくはロッカーを開け、なかに入っていたポスターを取り出しはじめた。振り向く勇氣はなかつた。スカートを覗いていたのを見られてしまったのだから。

だが、いつまでも彼女に背を向けてはいられない。ぼくは拳を握りしめ、思い切つて振り向き、取り出したポスターを差し出した。

「学期末パーティー、楽しみよね」

ぼくは、差し出したポスターを取り落とした。

ナタリーは、ノーブラだった。豊かに盛り上がった乳房がテニスブラウスを押し上げ、乳首が浮きだしていた。

彼女は、笑いながら屈み込み、落ちたポスターを拾った。垂れ下がった乳房が、ますますブラウスの盛り上がりを大きくした。

ぼくは、再び彼女に背を向けて、ロッカーのなかのものを取り出しはじめた。

ナタリーは、普段はブラウスの下にスポーツブラをしていたはずだ。さつき会ったときもそうだった。なぜ、脱いだんだ？

内心の困惑をよそに、ぼくのペニスにふたたび痛いほど膨張していた。ロッカーからポスターを取り出しては彼女に手渡ししながらも、ぼくの脳裏は、ブラウスの下で豊かに実っている彼女の乳房のイメージだけに占領されていた。

「ねえ」

ナタリーが言った。

「ジェイクは、テニスほしないの？」

「いや……したことない」

「やってみない？」

「そうだね……」

「テニスって面白いスポーツよ。私は十四歳のときに始めたの。思い切りボールをラケットで叩いてやるのって、ストレス解消には最高よ」

彼女はけたたましく笑い、ふと困惑したように口をちいさな手でふさいだ。彼女の視線は、ぼくの股間に注がれていた。

「あかさ」

ぼくは慌てて言った。

「とりあえず、このポスターをカフェテリアに持っていこうよ。サンダース先生は、そこに貼るようになって言ってたから」

「そうね」

ナタリーは、ポスターの束を抱え上げ、ぼくに背を向けて歩きはじめた。ぼくは脚立をもって彼女の後に従った。

サンダース先生の部屋を出ると解放された気分だった。狭い部屋に彼女と二人っきりになったのは夢のようだった。だが、あまりにも性的興奮が激しすぎて、それを悟られないように押し隠していたために、そうとうの緊張を味わい神経が疲れたのだ。

ぼくらは無人のカフェテリアに入った。ナタリーはテーブルにポスターを置き、ぼくは壁に脚

立をセットした。

「ぼくが貼っていくから、順番に手渡してくれる？」

そう言うと、

「了解」

彼女は、テーブルの上にポスターを順番に並べはじめた。ぼくはテープを手にして脚立にのぼった。

「はい」

ナタリーの声に振り向いて、またはや眼を見張った。ナタリーは一枚のポスターを差し出していた。彼女のブラウスのボタンが外れていて、上から覗くと乳首が丸見えなのだ。最初からボタンは外れていたっけ？ ぼくは困惑した。ナタリーの大きなブラウンの瞳は無邪気に微笑んでいる。意図的に外したわけではなさそうだ。

乳首に頭を支配されてぼうっとしているぼくに、ナタリーは訝しげに首を傾げた。

「どうかしたの？ ジェイク」

「いや、なんでもない」

彼女は楽しげに作業をつづけた。

お喋りをしながら、彼女がいかにスポーツが、とくにボールゲームが好きかということに驚か

された。テニスだけではない。サッカー、バレーボール……。

彼女の口からは、何度も「玉（ボール）」という単語が発せられた。サッカーを語るときは「玉を蹴る」、テニスで強いスマッシュを放つことを「思い切り玉を引っぱたく」というふうになる。こころなしか「玉」という単語にアクセントが置かれているような気がして奇妙に感じたが、それよりもぼくは、ポスターを受け取る度に、彼女のブラウスの胸元から覗く乳首に心を奪われていた。

数枚、貼りおえた後、彼女が提案した。

「交代しない？ 今度は私が貼るわ」

ぼくは胸が震えた。脚立の上から彼女の乳首を見ることができた。今度は、下から彼女のスカートの中を見ることができそうだ。

「疲れてるみたいだね」

彼女は親切そうに言った。ぼくは、

「ありがとう。じゃ、お言葉に甘えるよ」

と言い、脚立を降りた。

ナタリーはテープを受け取り、注意深く脚立にのぼった。

「じゃ、お願い」

ナタリーが手を差し出した。ぼくは、ポスターを一枚、手渡した。彼女は、壁に向かってポス

ターを貼りはじめた。ぼくは、しめしめ、と彼女のスカートのなかに視線を移し、息を飲んだ。

彼女は、テニス用のパンティではなく、細い濃紺のパンティにはきかえていたのだ。

「はい、つぎ」

ナタリーが振り向いた。ぼくは、驚きを隠しながら、次のポスターを手渡した。手が震えていた。

ナタリーが両手を伸ばしたり、畳んだりする度に、豊かな胸が揺れた。すんなりした脚はくるぶしからつけ根まで丸見えた。さきほどはテニス用のパンティに覆われて見えなかった可愛らしい尻も、細いパンティにはきかえているために半ばほど見える。そして、「はい、次」と彼女が振り向き、前かがみになって手を差し延べる度に、胸元から零れおちそうな乳房や乳首がさらされる。ぼくは、自制心を保つのに必死であった。

「ねえ」

ナタリーが作業をつづけながら訊ねた。

「学期末パーティーには出席するんでしょう？」

「いや……たぶん、いかないと思う」

「なんで？」

ナタリーが訝しそうに言い、それから悪戯っぽい微笑を浮かべた。

「私、ともだちと一緒に出るつもりよ。あなたが好きそうなタイプだよ」

「いや、その、ぼくはそういう柄じゃないし……いや、女の子と出会えるのは嬉しいけど、踊れないし……」

「あはは、私だつて踊りは苦手よ。ボールゲームは大好きだけど」

彼女は笑った。その拍子に、ブラウスの胸元から、乳房が飛び出した。ぼくは卒倒しそうになった。いまにも射精しそうだった。

「ね、あがつてきてくれない」

ナタリーは平然と乳房をブラウスに押し込みながら言った。

「これ、ちよつと一人じゃ無理だから」

ナタリーはポスターを貼りおえ、テーブルの上には、学校のマスケットのミニチュアだけが残っていた。かなり大きくて、たしかに彼女一人では無理だ。

「でも……」

ぼくは躊躇いがちに言った。

「二人一緒に乗つてられるかな」

「大丈夫よ。私はこっち側に立ってるから、ジェイクはそっちにいて」

ナタリーは、脚立を一段下りて、壁側の踏み板に乗った。ぼくは、ミニチュアを手に、逆側の踏み段に立った。

ナタリーはすぐそこに、触れ合はんばかりの位置にいる。彼女の腰のすぐ間近に、勃起したぼ

くのペニスがあるのだ。ぶつかったりしたら、どうしよう。

ぼくらは、そろそろとミニチュアを持ち上げた。そのとき、ナタリーがバランスを崩した。

「あ」

彼女はよろけ、ぼくに向かって倒れてきた。体がもつれあった。ふわっと体が宙に浮いた。

ぼくは、激しい勢いで仰向けに床に叩きつけられた。彼女の体がぼくの上に着てきた。一瞬、彼女の驚愕した表情が見えた。次の瞬間、彼女の腕がぼくの胸に叩きつけられ、同時に、彼女の膝小僧がいきおいよく、ぼくの股間に炸裂した。

「ぎゃああああ!!!」

ぼくは絶叫した。彼女の膝はあやまたず、睾丸に命中したのだ。

ぼくは激しく痙攣し、おおいかぶさった彼女を撥ね飛ばし、両手で股間を抑えて体を丸めて悶絶した。睾丸が破裂したように凄まじい激痛に覆われていた。ぼくは呻き、七転八倒した。

「やだ〜っ！ ごめ〜ん！」

ナタリーはおろおろして叫んだ。彼女は立ち上がり、ぼくに近寄ってしゃがんだ。

「ね……、だ、大丈夫……？」

彼女は迷子になった子供のように狼狽していた。もともと敏感な急所に打撃を受け、立つこともできずに涙を流して転げ回っているぼくを前にして、どうしていいか分からず、困惑しているようだった。

ナタリーは、そっとぼくの腰のあたりに手をやり、酔っぱらって嘔吐している人を介抱するよ
うに撫でさすった。

「う……うう……」

ぼくは呻くしかなかった。なんてことだろう。つきさつきまで、ぼくは天国にいた。彼女の美
しい乳房や、完璧なお尻や、美しい脚をじっくりと観察できた。ところが一転して地獄に突き落
とされた。

「ね……ジエイク……」

ナタリーはぼくに顔を近づけ、優しい声でいった。彼女は、申し訳なさそうに微笑んでいた。
かえって顔から火が出るほど恥ずかしかった。

「ごめんね……ほんとに……ごめんなさい！」

だが、その眼は、どこかでぼくの苦境を楽しんでいるようだった。彼女はぼくをさすりながら、
子供をあやす母親のように言った。

「ほんと、悪かったわ。こういうときって……どうすればいいの？」

どうするって……こういうときは我慢するしかない。ぼくは、なんとか立ち上がろうともがい
た。とにかく男らしく振る舞うしかない。

ぼくは、激しく痛む股間や下腹部を手で抑えないようにして、なんとか立ち上がった。息が乱
れていた。できることなら、しゃがみこんでいたかったが、これほどの美少女の前でそんな真似

ができるはずがない。

「な……なんでもないよ……。仕方ないよ……。君の膝がみぞおちを直撃したんだ……。それで、
ちよつと息が切れちゃって……」

ぼくは、無理やり笑った。

「ああ、よかった……」

彼女は右手を額にあて、ほつとしたような表情で笑った。

「てっきり私……あなたの、その……玉を潰してしまったかと……」

彼女は、早口で言った。

「はは、まさか……」

ぼくは、いくぶん立ち直り、背筋を延ばして言った。

「フットボールのとき、男子にタックルされて当たっちゃったことはあったけどね。でも、女の
子にぶつけられたくらいで、そんなに苦しむわけではないよ」

はたして彼女は信じたのだろうか。ナタリーは、くつくつとおかしそうに笑うだけであった。

しばらく椅子に腰掛けて、激痛が納まるのを待った。ナタリーはしきりに謝ったり、ぼくの受
け答えにおかしそうに笑ったり、ほんとうにすまながっているのか、ぼくのぶざまな姿を思い出
しておもしろがっているのか、分からなかった。

授業が始まる時間になった。ぼくは、まだ残る痛みをこらえて立ち上がり、残った飾りつけの

品をかき集めた。彼女がじっとぼくを見つめているのに気づいた。ぼくは、痛む股間を庇いながら、なるたけそろそろと腰を後ろに突き出すようにして歩いていたので。

「いや、今日は楽しかったよ」

ぼくは、ごまかすように早口で喋りながら、ポスターの束を抱えた。

「手伝ってくれて、ありがとう。助かったよ」

そのとおりで。彼女の素晴らしいボディを堪能できたのだから。もちろん、最後の締めくくりは、言語を絶する激痛だったわけだが。

「今朝じゆうに仕上げたかったけど、結局全部は貼れなかったね。また、作業しないとイケないな」

ぼくは大声で言った。そう。できればもう一度、手伝ってほしい。そして君のすばらしいボディで目の保養をしたい、今度は、悶絶することのないように……。

彼女は、訝しげにぼくを見ていた。いや、ぼくの背後を見ていた。ぼくは後ろを振り向いた。脚立が倒れていた。

「おっ、いけねえ！」

ぼくはなるべく快活に言った。

「ぼくがポスターを、きみが脚立を運ぶのは、あべこべだよな。じゃ、これ持って」

ぼくは彼女にポスターを渡し、脚立に歩み寄った。

「いいのよ。だって……まだ痛いんじゃないの？ あ……みぞおちが……」

「そんなことないさ」

「だって、歩き方、へんよ」

「大丈夫だって」

ぼくは脚立を、彼女はポスターをもってカフェテリアを出た。

2

その日の午後。

授業の終わりを告げるベルが鳴り響き、ぼくは居眠りから覚めた。

その日は、一日中無駄にすごしたようなものだ。ぼくは、まったく集中力を欠いていた。先生が何を喋っても耳に入らなかった。ぼくはぼうつとしてゾンビみたいに座していただけだった。

白日夢のなかで、ぼくはナタリーの豊かな乳房を揉みしだき、かわいいお尻を撫でていたのだ。

もう一度、ベルが鳴り、ぼくはやつと解放された。いきおいよく立ち上がり、教室を飛び出した。はやくテニスコートに行つてナタリーを見たかった。鞆丸に受けた凄まじい打撃など記憶から飛び去っていた。テニスコートまで走りながら、ペニスが勃起してくるのを止めようがなかった。

雲ひとつなく晴れた暖かな日だった。

コートでは、数人の女の子がウォーミングアップをしていた。ナタリーもそのなかにいた。ぼくは、何げなくベンチに座った。

ふと、ナタリーが振り向いて叫んだ。

「あら、ジェイクじゃない！」

彼女は興奮していた。

「私たちが玉をひっぱたくのを、見に来たの？」

また「玉」か……。彼女が「玉」という言葉を口にしたとき、彼女と一緒にストレッチングをしていた少女が笑った。

「うん。今朝は助けてもらったから、応援しようと思って……。だって、うちの学校の男子は、あんまり女子のスポーツを応援しないだろ。だからさ」

こんな見え透いた嘘を、信じてほしいと心から願った。ほんとうは、たんに彼女に色目を使いたかっただけなのだが。

ナタリーの隣にいたベッキーが笑った。ナタリーは「ありがとう」とだけ言って、ふたたびストレッチを始めた。ナタリーは、ベッキーになにかひそひそ声で喋り、それから二人そろって大声で笑いだした。

なにを喋ったかは聞こえなかったが、ナタリーのしぐさから、今朝起こった「事故」について言っているように思えた。きまりが悪かった。どうか、股間じゃなくて、みぞおちに当たったという嘘をナタリーが信じていますように。ぼくは必死に自分に言い聞かせた。

ウォーミングアップが終わり、ネットをはさんだボレーの練習が始まった。コートは四面あり、すべて女子テニスクラブのメンバーが使用していた。ナタリーは、すでにスポーツブラを装着し、テニス用のパンティをはいていた。残念だったけど仕方がない。あんなパンティで、しかもノーブラでテニスの練習なんかするはずがないではないか。

十分ほど練習した後、コーチが少女たちを二人一組に分け、ダブルスの練習となった。ところが、組分けしてみると一人足りないことが分かった。

ナタリーはベッキーとペアになっていたが、なにごとか相談し、それからコーチと話しはじめた。やがて合意がなったらしく、ナタリーはぼくに向かって楽しそうにスキップしながら駆けつけ、フェンス越しにこう言った。

「ねえ、ジェイク。どうしても一人足りないの。よかったら、あなたも参加しない？ あなたと私がペアになって、ベッキーとロビンのチームと対戦するの」

「でも……」

ぼくは困惑した。

「テニスはやったことないし……」

「だいじょうぶよ」

彼女は甘い声で勧誘した。

「あなたはスポーツが得意そうだし、すぐに覚えるられるはずよ。簡単よ。ただ、玉をラケットで思い切りひっぱたけばいいだけなんだから」

ぼくは断ろうとして、ふと、彼女のテニスブラウスが汗で濡れ、その下のスポーツブラがくつきりと浮かびあがっているのに気づいた。しかも、彼女の乳首が突き出して、軽く盛り上がっていた。ぼくはとまどい、思わずこう答えていた。

「わかった……やってみるよ」

ぼくは立ち上がった。

「ちよっと着替えてくる」

「よかった！」

ナタリーははしゃいだ。

「じゃ、着替えてきて」

彼女は顔を輝かせてチームメートのところへ戻っていった。

ぼくはロッカールームに行き、Tシャツとジーンズを脱いだ。ふと、ぼくはだらりと垂れている陰囊に気づいた。これは、サポーターを着けたほうがいいかな、と思った。また、なにかの事故で睾丸に衝撃を受け、のたうちまわって女の子たちに「弱虫」と思われるのはいやだった。も

ちろん、サポーターを着けるのは感触のいいものではないし、だいいち、動きにくい。まあ、まさか一日のうちに二度までもあんな目にあうことはないだろう。

なに、相手は上級生とはいえ女の子だ。事故を恐れてぶざまなプレーをするより、男の力を見せつけてやったほうがいい。

ぼくは、細長めのバスケットパンツに白いTシャツに着替え、コートへと戻った。

コートでは、ナタリーたちが待機していた。

ナタリーはバッグのなかからテニスラケットを取り出し、ぼくに渡した。相手となるベッキーとロビンが対面のコートに移動した。

「ナタリー」

ぼくは言った。

「ぼくは一回もテニスをしたことがないんだ。ルールを教えてくださいませんか」

「いいわ。じゃあ、まずラケットの持ち方と、ボールの打ち方ね」

「ありがとう。頼む」

ぼくは笑顔で答えた。

「まずね、こんなふうにラケットを握って」

彼女は、ぼくの体を少しずつ修正しながら、説明した。彼女の手がじかにぼくの体に触れた。

彼女は、息が吹きかかるくらいまでぼくに接近し、ぼくの背中に回って、ラケットの振り方をコピーしてくれた。たまたま、背中になにかが触れた。彼女の胸だろうか？ そう間違いない。彼女の乳首だ！

「いい？ これがフォアハンド。バックハンドはこうよ」

彼女はぼくの正面に回った。

「このラインのなかに打ち返せばいいの。サーブのときだけは、あのラインの外に打たなければならぬ。簡単でしょ……。ベッキーもロビンも、けっこう強いボールを打ってくるわ。だから気をつけてね。下手すると怪我のもとだから」

対面のコートでは、ロビンとベッキーが笑いながら、ボールをラケットの上でリフティングしていた。

「ところでジェイク。気分はどう？」

「え？」

「もう、気分悪くなったりしてない？」

ナタリーは、ちよつと顔をほころばせ、ウィンクしてみせた。

「忘れてたよ。なんでもないさ」

試合開始。ナタリーは、ぼくの右後ろにさがり、ぼくが前面に出た。

ベッキーがサーブした。ボールはナタリーのサイドに飛んだ。ナタリーがリターンを返した。

ぼくは、テレビでテニスの試合を見たり、コートで女の子たちがプレーしているのを見たことはあるが、実際にコートに入ったのは初めてだった。ナタリーのリターンをベッキーが打ち返した。びゅつとうなりをあげて、ボールが飛んできた。運よく、ボールがラケットに当たった。夢中で差し出したラケットに当たったボールは、これまた運よく、相手のコートに入った。

だが、そのリターンは弱すぎた。ネット際にいたロビンがそのボールを凄まじい勢いで打ち返した。ボールは再びぼくの顔に向かってうなりをあげて飛んできた。ぼくは思わず、ラケットで顔をガードした。もちろん、ビギナーズラックが二回もつづくはずがない。ボールはぼくの足元でバウンドし、コートの外に転がっていった。

「すげえ……」

ぼくは思わずうめいた。

「女の子が、あんなに強いボールを打ってくるなんて……」

いちおう、感心したふうを装ったが、彼女たちはぼくの声から脅えを感じ取ったようだ。ロビンは立ち止まって髪の毛を直しはじめ、ベッキーは慰めるように言った。

「初めてにしてはよくやったんじゃない？」

だが、彼女の表情やしぐさには、失望した様子がありありと見てとれた。

「ちよつと、軽めにやろうか」

ロビンは髪の毛を直しおえて提案した。そのほうが、ぼくもゲームに入りやすいだろうと配慮

してくれたのだ。

「初めてなんだから、仕方ないよね」

ナタリーとベッキーも賛同してくれた。ぼくはほっとした。怪我せずにゲームを終えることができそうだ。

それからは、試合はスムーズに運んだ。彼女たちは、ぼくが打ち返しやすいように、軽く打ってくれた。ぼくは余裕をもってプレーに参加でき、おかげで、彼女たちのスタイルのいいボディが流れるように躍動し、それにつれてシャツの下の胸がゆさゆさと揺れ、スカートの下のパンティがちらちらするのを堪能することができた。

おお、ここは天国だ！ とても信じられなかった。これほどの美少女たち三人に囲まれてテニスをしているなんて。これ以上の幸せを味わったことがかつてあっただろうか。

あと2ポイントとれば、ぼくらの組の勝ちとなる。男の意地にかけて、ここはどうしてもナタリーに勝利をプレゼントしてあげたかった。たとえ、ぼくのためにベッキーやロビンが手加減してくれているにしても、勝ちはずだ。ただ、ずっとコートを走り回っていたため、疲れを感じていた。

長いボレーの応酬となった。ロビンが、いやなスピンのかかったボールを打ち返してきた。本来ぼくが打ち返すべき位置に落ちたが、背後にいたナタリーが前方にダッシュしてきた。経験の

ないぼくには無理だと判断したのだろう。

だが、ぼくは柄にもなく男の意地を發揮しようとした。思い切りラケットを延ばしてボールにくらいついた。だが、スピンのかかったボールはバウンドして、ぼくのラケットの届かないほうに飛んだ。ぼくは両脚を思い切りひろげ、バックハンドでボールを受け止めようとした。

そこにナタリーがダッシュしてきたのだ。運動神経のいい彼女だったが、急なことでブレーキがかからなかった。

正面衝突だった。ぼくの胸に彼女の胸がぶつかった。同時に、彼女の右膝が、大きく広げられた。ぼくの両脚のつけ根に打ち込まれた。ぼくの睾丸が彼女の膝とぼくの骨盤との間で圧縮された。一瞬、体が宙に浮いた。

彼女はすぐに、ぼくから離れた。顔に驚きと同情が浮かんでいた。ぼくは、コートに着地し、すぐに立ち上がるうとしたが、凄まじい激痛が股間から下半身全体を覆った。膝がゼリーのよう

に硬度を失い、ぼくは横倒しに倒れた。

「あちゃあ！」

ベッキーとロビンが同時に叫び、コートに転がって呻く馬鹿者を見物しに駆け寄ってきた。ナタリーはおろおろして訊ねた。

「ね、だいじょうぶ？……」

「あ……だ、だいじょうぶ……あ……」

まったく大丈夫ではなかった。あまりの激痛のため、五感が弾け飛んでしまったようだった。かすかに残った聴覚が、女の子たちが必死に笑いをかみ殺しているのを感じ取った。

ナタリーがぼくの傍らにしゃがみこんだ。彼女の大きなブラウンの瞳が見開かれ、手で口を押さえていた。ぼくの目は苦痛のあまり涙が溢れそうになっていた。泣いている姿を見せたくなかったで、ぎゅっと目を閉じて涙がこぼれないようにがんばった。

ロビンとベッキーがつづいてかがみこんだ。なんなぶざまなんだ。さっきはナタリー一人だったけど、今度は三人の女の子に囲まれて、のたうちまわっているのだから。ぼくは、ひたすら現在の屈辱的な苦境から逃れたかった。

ベッキーはナタリーを見てぶっきらぼうに言った。

「だいじょうぶなんじゃない？ あんたの膝が彼のみぞおちを直撃したみたいね」

「そうよ。ベッキーの言うとおりだよ」

ロビンも安心したように応じた。彼女たちの台詞は、いかにも女の子らしく、ぼくの睾丸を襲った激痛についてまったく無知をさらけ出していた。

「ちよっと息がでなくなっているだけ。彼は大きくて強そうだし、テンカウント数える前に立ち上がるはずよ」

ここは、ベッキーやロビンの謝った推測が正しいことを証明しなければなるまい。とりあえず、

股間を押さえた両手を見られてはなるまい。ぼくは彼女たちに背を向けようと必死になって、体を反転させた。そのとたん、全身に凄まじい激痛が走った。

「うううっ」

ぼくは思わず悲鳴をあげた。

「ちがうわ、ベッキー、ロビン」

ナタリーが口を開いた。そのせりふは、ぼくの男としてのプライドを深く傷つけた。

「みぞおちじゃないわ」

ベッキーは、疑わしげに訊ねた。

「なんでわかるの？」

ロビンも、口を挟んだ。

「みぞおちじゃなきゃ、どこよ？」

「うゝん。あなたたちからはよく見えたと思うんだけどな……」

ナタリーは躊躇っていたが、意を決したように言った。

「つまりね。あの男の子の……知ってるでしょ？ 脚と脚の間にあるあれ……」

ナタリーはしばらく、男の「睾丸」をどう言い表すべきか、迷っていた。だが、ベッキーとロビンはすぐに察しがついたらしい。

ロビンがこらえきれずに笑い出した。ナタリーとベッキーもつられて哄笑した。

ああ、なんてこった。ぼくは腹立たしくなった。ついさっきまで、三人の美少女がかぶっていた哀れみと同情に満ちた仮面が剥がれ、彼女らは陽気にお互いを叩いたりしながら笑い転げているのだ。なんでみぞおちだと同情され、それよりもはるかに痛い金玉だと笑い物にされなきゃならないのだ。

「いや、まいった、まいった」

ベッキーはまだ笑いながら言った。

「なんでわかんよ、その…玉だつてさ。ひよつとしたら、見たことあるの？」

ナタリーはベッキーに返事しようとしたが、ロビンの興奮した叫びに遮られた。

「私は見たことないけど、間違えて弟の玉を蹴っちゃったことあるよ。向こうからぶつかつてきてさ。膝が入っちゃったわけ。あいつ、『ぎゃっ』って叫んで倒れちゃった」

「へええ」

「弟のやつ、わんわん泣いちゃつてさ。起き上がれなくて。私、なにが起こつたのかわからなくておろおろしてたら、ママがやってきて、弟を起こして、腰のとこをとんとんやつてるわけ。で、あとから聞いたんだけど……」

「なになに」

「玉があがつちゃつて、下りてこなくなることがあるんだって！」

三人はまた笑い転げた。

ぼくはもう、一刻も早くこの場を去りたかった。だが、体はまったくいうことを聞かない。三人のかわいい女子高生たちは、激痛と屈辱と恥ずかしさに苛まれて悶絶するぼくを前にして、彼女らには理解できない、男性の「玉」の敏感さについて議論をつづけた。

「ねえ、ロビン」

ベッキーが言った。

「玉つてさ……どんな感触なの？」

「うん。なんていうのかな……」

ロビンは自信なげに言った。

「けつこう柔らかくて、弾力があつたと思うけど……忘れちゃった」

「こんな経験滅多にするもんじゃないし、私たちにはないものだからね」

ナタリーはちょっと偉そうに言った。

「でもね、たしかにロビンの言うとおりよ。いまでも感触が膝に残ってる。丸くて、柔らかくて……」

三人はまた笑った。

「笑っちゃいけないだよね」

ナタリーは、まだ笑いながら、ぼくの肘を撫でさすった。

「ごめんね、ジェイク」

女の子たちは、「玉」論議を打ち切って、口々に慰めの言葉を述べはじめた。「不運だったね」「かわいそう」……。かわいい女の子たちに哀れみをかけられている。顔から火が出るくらい恥ずかしく、情けなかった。

恥ずかしいのは、それだけではなかった。なにしろ、ぼくのペニスは、地獄のような睾丸の激痛にもかかわらず、勃起していたのだ！

ナタリーが柔らかい掌でぼくの体を撫でさすってくれているせいでもあった。女の子の口から「玉」などという卑猥な台詞が吐かれたせいでもあった。

とにかく、この状況から抜け出さなくてはならない。自分が動けなくても、女の子たちには遠ざかっていてほしかった。

「だ、だいじょうぶだよ……」

ぼくは、勃起した股間を彼女たちの視覚からできるだけ遠ざけるようにして、彼女らに顔を向けて呻いた。

「見た目ほど痛いわけじゃないんだ……それに、もう練習は終わりだろ？」

ほかの少女たちはすでに練習を終え、コートから去っていた。コーチの姿もなく、残っていたのはぼくたち四人だけだったのだ。

「着替えてきなよ。ぼくは……息ができるようになりさえすれば、一人で帰れるから……」
ナタリーはぴしゃりとぼくの提言をはねつけた。

「ばかなこと言わないでよ、ジェイク」

彼女は非難がましい目でぼくを見た。

「ちよつと、見せて」

言うなり、彼女はぼくの正面に回ってかがみこみ、股間に向かって手を延ばした。彼女の手が、ぼくのパンツにかかった。ぼくはパニックに襲われた。

「そ、そんな必要は……」

ぼくは、大急ぎで彼女の手を払おうとした。ここでパンツを脱がされたら、勃起しているのがばれてしまうじゃないか。

「見てみないと、だいじょうぶかどうか分からないじゃない」

彼女は手早くパンツの紐を緩め、いつきにずり下ろしたのだ。

とたんにナタリーの手が硬直した。

勃起したペニスが、テントのようにぼくのブリーフを押し上げていた。

三人の少女は彫像のように動かなかった。眼は驚愕のあまり大きく見開かれていた。

「やっばし……」

ベッキーが呻き、片手でぼくの股間を指さし、片手で口を押さえた。

「なにこれ！」

ロビンが叫んだ。その眼は、ぼくを痴漢であるかのように見ていた。

「ち、違うんだ……」

ぼくは叫んだ。すばやく頭を回転させた。ここはひとつ、彼女らの男性の生殖器に対する無知を利用して逃れるしかない。

「変に見えるかもしれないけど、よくあることなんだよ……」

ぼくは、自信に満ちた口調をつくった。

「男の子の玉が何かにぶつかったりすると、その……ペニスが勃起するんだよ。それだけなんだ。変なこと考えないでね」

ぼくは、彼女らをなだめるように手を振った。

「ほんとに？」

ナタリーが訊ねた。ベッキーとロビンはお互いに顔を見合せ、「そういうことなのか」と言うように肩をすくめた。しめしめ、うまくいってるぞ。

だが、そう思ったのは早計だった。ナタリーはふたたびぼくに向かってかがみこみ、楽しげに言った。

「そうだとすると、やっぱりちゃんと見せてもらわなきゃ」

彼女は素早かった。ぼくがとどめる暇も与えず、彼女はぼくのバスケット・パンツとブリーフを脱がせようとした。ぼくは必死に抵抗したが、とうとう、ぜんぶ脱がされてしまった。半ば勃起したペニスと、真っ赤に腫れあがった陰囊が露になった。

「うわ……」

ナタリーが呟いた。

「見てよ、これ……」

少女たちは、ぼくを取り囲むようにして、無言でコートに膝をついた。顔が火照り、息が荒くなっていた。ブラウスの下の乳首がぴんと立っていた。

ぼくは、かえって照れや恥ずかしさよりも、プライドを感じた。彼女たちがぼくのペニスのサイズに眼を奪われている。ぼくのペニスは完全に勃起すると二〇センチ以上になり、太さは八センチにもなるのだ。

ぼくは肘をついて半身を起こした。

「どうだい、ちよつとしたもんだらう。もしお望みなら、もっと大きくしてみせることもできるよ。手伝ってくれたらね」

ぼくは、得意気だった。三人はたがいに目配せしあい、言葉にならないメッセージを交わした。ナタリーは、三人のリーダー格で仕切っているようだった。

いきなりナタリーが手を延ばして、赤く腫れた陰囊をそっとすくい上げるようにして持ち、掌でなかの睾丸を転がすようにして弄びはじめた。

ロビンとベッキーは、なにかに取りつかれたようにぼうつとしていた。やがて、ロビンは自分の乳房をスポーツブラの上から両手で愛撫しはじめた。そしてベッキーは、両手をスカートの下

にもぐりこませ、プッシーをまさぐりはじめたのだ。

小さな、満ちたため息が、彼女たちの唇から漏れた。

「あなたの玉、大きいのね」

ナタリーが、嬉しそうにそう言い、舌で唇を嘗めた。

「すぐに分かったわ。最初にあなたの玉を蹴ったとき」

彼女は感嘆したふうに喉を鳴らした。

「股間にぶらさがっている柔らかい玉が、そんなに感じやすいだなんて、驚きだったのよ」

ぼくは、あまり彼女の言葉をの意味を考えないようにして、彼女の愛撫に身を委ねた。やわらかな掌の巧みな愛撫によって、やがて睾丸が精液で満たされ、鎌首をもたげた。ペニスの先端から逆ろうとしていた。

ぼくは快感に腰をくねらせ、思わず固くはちきれんばかりのペニスをみずから握りしめ、しごきはじめた。

ふと、少女たちの笑い声が聞こえた。

「ぎゃああああ！！」

ぼくは、突然の激痛に悲鳴をあげた。

ナタリーが、強く睾丸を握りしめ、思い切り引っ張ったのだ。

快感は突如として苦痛にとつてかわられた。ぼくは身を反らせ、後頭部をコートに打ちつけた。

ナタリーはさらに握りしめた手に力をこめた。焼け爛れたような痛みにも、ぼくは再び体を持ち上げ、眼を見開いた。ベッキーが拳を固めて、ぼくの睾丸に撃ち下ろそうとしていた。ナタリーはしっかりと陰囊のつけ根を握りしめていた。もはやパンチを逃れることは不可能だった。

激しい衝撃が睾丸から下腹部へ、そして胸部へと、稲妻に打たれて引き裂かれた大木のようにぼくの体を突き抜けた。

ぼくは、胸も張り裂けんばかりの悲鳴をあげた。

三人の少女は、頭を後ろにそらし、引っ繰り返りそうになって笑い転げた。

「おっかしい！！」

ロビンが言った。

「まるで操り人形みたい」

「そ、糸を引っ張ってやれば……」

ベッキーがぴんと指でぼくの睾丸を弾いた。ぼくはまた悲鳴をあげて、身を反らし、仰向けに倒れた。

「このとおり！！」

ぼくは恐怖に目を見開いた。やっと理解できた。ぼくは、彼女たちの気まぐれな好奇心のなされるがままの立場に置かれてしまっているのだ。ナタリーが睾丸から手を離さないかぎり、拷問を逃れる術はない。だが、彼女の手を振り払おうとする前に、彼女はぼくの睾丸をひねりあげる

だろう。

「た、頼む……」

ぼくは哀願した。

「玉から……手を離してくれ。なんでもするから……い、痛いよお」

「ナタリー、あんただけ玉を一人占めはずるいよ」

ベッキーが言った。邪悪な微笑みを浮かべながら、ナタリーはぼくの陰囊から手を離した。ベッキーが親指とひとさし指でぼくの右の睾丸をつまみ、ナタリーは彼女は左の睾丸をつかんだ。

「ねえ、ジェイク。あんたは女の子に泣かされるような弱虫のくせに、立派な玉を二個も持つてるじゃない。ていうか、こんなもの二個も持つてるから、弱虫になっちゃうのかな」

二人は、ぼくの玉を引つ張ったり、ひねったり、ありとあらゆる手荒な手段を駆使して、ぼくに悲鳴をあげさせたり、痙攣させたりして楽しんだ。この恐ろしい拷問が数分も続いたのだ。

ふと、ロビンが立ち上がり、もう帰らなきゃ、と言った。

「それに、こいつ失神しそうだよ」

この一言で、二人の拷問は中止となった。彼女たちは、ぼくの陰囊から手を離して立ち上がった。

やっと……。ぼくは思った。やっと……。家に帰れる。

ぼくは、もう息をするのがやっとの状態、悲鳴をあげることすらできなくなっていた。ここ

までやられれば、彼女たちの好奇心を満足させられただろう。

ぼくは、なんとか両手と両膝をついた四つん這いの姿勢をとった。バスケット・パンツが膝にまつわりついたまま、裸の尻を突き出すような情けないかっこうだったが、それがせいじっぱいだった。

「楽しかったでしょ、ジェイク。三人の女の子にあんなふうに遊んでもらえるなんて、滅多にないことよ」

ナタリーが、ぼくの顔を見下ろしながら言った。

「今朝、あんたが私をどんなふうに見ていたか、気づいてなかったとでも思ってるの？ あんたは私の胸やお尻をこっそり覗きこんでいた。別にそれがいやだってわけじゃないけどね。やりたいさかりの十代の男の子にとってはノーマルな行為だし。だから、私もそれに応えてあげようと思っただけ」

言うなり、彼女はブラウスを脱ぎ、とまどうぼくの目の前に置いた。さらに、彼女はスポーツブラまで脱いでしまった。ナタリーの大胆な行動にぼくは肝を潰した。ベッキーとロビンはどうするんだろう？ 困惑と期待が入り交じり、胸が高鳴った。

ナタリーは、四つん這いのまま見上げているぼくに近寄り、その大きく揺れる乳房を、ぼくの顔につきつけた。きれいな乳首がぴんと立っていた。

彼女にしがみつき、その深い胸の谷間に顔を埋め、ひきしまったお尻をつかんだ。ペニスが痛

いほど勃起した。ぼくは彼女の柔らかな乳房に顔を激しくこすりつけ、初めて味わう感触に夢中になった。四つん這いになったぼくの両膝は広がり、陰囊が前後左右にぶらぶらと揺れた。

ふと、だれかがぼくの背後に立った。ロビンが叫んだ。

「用意はいい？　いくよ！」

「やめて！」

叫んだが遅かった。彼女の足がぼくの睾丸に叩きつけられた。ナタリーが笑った。ぼくは、彼女の体から滑り落ち、股間を両手で押さえて悶絶した。ぼくの「男らしさ」は完全に打ち砕かれ、ひたすら苦悶の呻きをもらすほかなかった。

「あはははは」

ロビンが笑った。彼女はシューズを脱ぎ、素足だった。

「思い出したわ！　そうそう。弟の玉を蹴っちゃったときも、こんな感じだった」

それから三人ははしゃいだ。男の子の玉を蹴るって、こんなに気持ちいいもんなんだね！　足の甲に裸の玉が当たる感触が忘れられそうにないわ。また、やろうね。そうね、ジェイク、今度もお願いね。

哄笑と蔑みの表情を残して、少女たちはテニスコートを去った。ぼくは、ざらざらしたコートに一人、取り残され、這いつくばっていた。

やっと拷問が終わったのだ。